

魔法のプロジェクト2022 活動報告書

報告者氏名：亀田隼人

所属：東京都立花畑学園

記録日：2023年2月18日

キーワード：移動支援、スケジュール管理

【対象生徒の情報】

1. 学年 知的障害特別支援学校中学部3年

2. 障害名 知的障害

3. 障害と困難の内容

● 愛の手帳4度（東京都の療育手帳で軽度に相当）

● 「うまくやりたい」「格好良くいたい」が、見通しが立たず自信がもてなかったり、伝え方がわからなかったりするため、体調や気持ちが不安定になるのではないかと考えた。そうだとしたら、見通しをもてる方法や相手に伝える方法を身につけてそれらをうまく使う経験を積むことが、自信の高まりや体調、気持ちの安定に繋がるのではないかと考えた。

【活動目的】

1. 当初のねらい

A 見通しをもって行動できる方法を身につける。

B 困ったことを相手に伝える。

2. 実施期間 2022年5月から2023年2月

3. 実施者 報告者と学級担任および母親

4. 実施者と対象生徒の関係

● 報告者：対象生徒と同じ学年所属の教員

● 学級担任：対象生徒の学級担任

● 母親：対象生徒の母親

【活動内容と対象生徒の変化】

1. 対象生徒の事前の状況

● 性格・特性

自分が担った係活動を毎日確実にやり遂げようとしたり、新しく習った所作をどの場面でもやろうとしたり、運動会などの行事で最高の成果を出せるようにトレーニングをしたりするなど真面目で頑張り屋な一面があった。一方で、疲れていることがわかっていてもそれを伝えることができず、体調を崩すことも多かった。

[エピソード1]

本校における毎朝の保健体育はグラウンドでのジョギングだった。6月で暑さも増してきていたため「ゆっくり走る」「歩いてもいい」「休んでもいい」「水分を摂ってもいい」ことを皆に伝えたくて実施した。本人は設定時間を走りきったが、活動後、教室で嘔吐した。

最近では分からないことを質問できるようになり不安を自ら解決するようになってきているが、新規の活動など見通しが立たないことや、自分自身でできないのではないかと予想したことに強い不安をもち、それらが予定にあることが分かると腹痛などを起こし学校を欠席することが多かった。小学生時代には、心の支えとなる小さなぬいぐるみを常に携帯して生活していた。

● 運動面

低緊張なため姿勢の維持が難しいとされているが、現在の日常生活に支障はなかった。作業学習など同じ作業が長時間続く活動に抵抗があった。鉛筆や箸の操作が可能だった。iPhoneでのフリック入力やゲーム機の操作も可能だった。

● 認識・学習面

音声による会話が可能だった。学校では集団に向けた指示を理解して行動することができた。また、タブレットや鉛筆削りなど自分に必要な物を相手の状況のみで適切なタイミング（相手が会話中の場合は終わるまで待つなど。）で要求することができた。

小学2年生程度の漢字を読み書きすることができた。

掛け算九九を理解していた。

時計を参照して始めたり終わったりすることができた。

貨幣を理解して金額を計算することができた。

● 対人関係

仲間と一緒に頑張ることが好きで、遊びや学習活動に学年の友達を誘う姿が多かった。また、相手に認められたい気持ちがあり、相手が喜ぶことや正しいことをやってアピールする様子もあった。しかし、何が正しいのかわからず探りながらの行動だったり、正しいことが本人にとって苦手や不安なことだったりすると、後になって疲れが出て学校を欠席することもあった。

● 家庭など学校以外での過ごし方

母親と2人の兄と一緒に暮らしていた。兄とは幼少期から公園で一緒に遊んだり、テレビゲームをしたりして過ごすことが多かった。最近兄にゲームの操作方法や社会的なマナーなどを指摘され、喧嘩になることもあった。母親は、その際の言葉遣いや腹痛などの心理的な不安定さを心配して精神科に通わせていた。

平日はほぼ毎日放課後等デイサービスを活用していた。

休日は母親とバスや電車を利用して買い物に出かけることもあった。

● 本人の思い

今年度になり本人にインタビューを行った。「好きなこと」を尋ねると、「電車やバスに乗ること」「食べること」という返答だった。また、「やりたいこと」の質問には、「友達と仲良くしたい」という返答だった。その他、「格好良くいたい」という発言もあった。「嫌なこと」の質問には、「喧嘩」という返答だった。どういう時に喧嘩になるのか尋ねると、「わからないことを言われたとき」で、その時はどうしているのかの質問には、「逃げる」「母親に話す」という返答だった。

● 家族の希望

母親は本人にコミュニケーションをうまくとってほしいという願いをもっていた。また、自立してできることが増えてほしいという願いもあり、かつては一人通学にも挑戦したが、コロナ禍による影響で中断している状態だった。一人通学練習では緊張から体調を崩したこともあった。

2. 活動の具体的内容

(1) 「お届け物いたします」

本人が相手の注文を聞き、指定された場所に届けたり、指定された場所から持ってきたりする取り組みで、学校生活場面で実施した。一連の活動には自力で見通しを立てるようになることをねらって（ねらいA）、時間や行程を管理する要素を入れた。これは、対象生徒が将来自立した行動ができるようになることをねらったものでもあった。また、困ったことに気づいたりそれを相手にわかるように伝えたりできるようになることをねらって（ねらいB）、相談や報告の場面を設定した。取り組みのながれは以下の通りであった。

① 注文票（図1）を使って注文を聞き取る。

② スケジュールアプリ（DropTalk（図2））を使って、指定場所までの道順や指定時刻を管理する。

③ 目的地に到着したことや届け終わったことを電話やメールで報告する。

④ 教室に戻り学級担任に言葉とカードで評価（図3）される。

また、道中で不測の事態があったときは、学級担任に電話やメールで相談する約束をした。

図1



図2



図3

(2)「街に出よう」

本人が、実施者と相談をしたうえで、自宅外でやりたい思いを叶える取り組みで、「お届け物いたします」の取り組みにおいてスケジュールの管理や報告、相談ができるようになった後に週末の家庭生活場面で実施した。これは、本人の生活圏を広げるとともにより充実した余暇を過ごせることをねらった取り組みだった。ながれは「お届け物いたします」の取り組みに準じたが、やりたいことは基本的に本人の意思を尊重した。やりたいことができる場所や目的地までの行程、当日の天候、持ち物などは質問紙(図4)やインターネットを使って調べた。

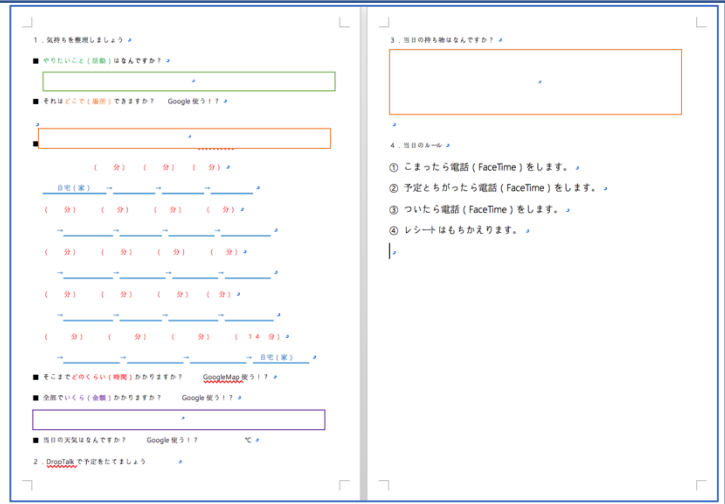


図4

2. 対象生徒の事後の変化

(1)「お届け物いたします」に関して

本人が楽しく前向きに取り組めるよう架空の会社を設定し、本人を社長とした。教室に事務所を置いて入り口に看板を立てた。看板は、インターネットから本人が好き画像を探し出し、報告者と一緒にデザインした。会社名は本人の希望で、自身の名前でもある「虎(タイガー)運送」となった(図5)。本人は看板を見て「俺はやりますよ!」と言うなど意欲をみせた。

取り組みを始める前にiPhoneによる通話やメールがどのくらいできるのかを確かめたところ、電話アプリ(図6)やFaceTime(図7)による音声、ビデオ通話、メッセージアプリ(図8)による文字入力に問題はなく、本人も使用に不安を感じないとのことだった。取り組みでは、iPhoneとiPadで報告、相談を行った。iPadには電話アプリがないため、主にはFaceTimeを活用した。

取り組みが始まると、本人はスムーズに注文をとってスケジュール化し(図9)、「写真を撮ってくる」(図10)「ボールペンや衝立を届ける」(図11、12)などのミッションをこなした。終わった後に感想を聞くと「楽しかった!」「簡単ですね!」など得意げに言う姿があった。また、朝登校すると「今日も虎(タイガー)運送はありますか?」と尋ねることもあった。ミッションを重ねるうちに、同じ目的地であっても指定されたとおりの道を正しく通って移動できるようにもなった。さらに、DropTalkにおけるスケジュール機能の時刻設定ができるようになると、目的地への到着時刻を意識して移動を急ぐ姿がみられるようになった。また出発しないのか尋ねると設定時刻を見せ「まだ大丈夫です。」と答え、予定時刻まで休んで待つ姿もあった。



図5



図6

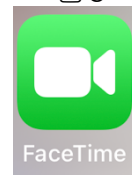


図7



図8

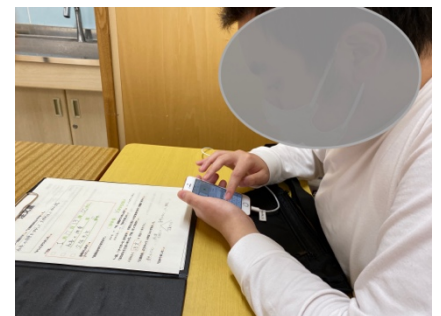


図9



図10



図11



図12

[エピソード2]

「体育館からメジャーを持ってくる」というミッションでは、体育館に着いたもののメジャーの場所がわからなかった。ステージ裏など思い当たる場所を探したが見つからなかった。本人は考えた結果、学級担任に電話をかけて保管場所や倉庫の開け方を尋ねた(図13)。メジャーを無事に見つけて届けることができ(図14)、感謝されると嬉しそうに笑った。



図 13



図 14

[エピソード3]

「校内の販売機で水を買ってくる」というミッションでは、販売機についたものの水が冷却中で購入できなかった。学級担任に電話をかけて代わりに緑茶を買うよう指示を受けたが、商品に記載されていた語が「緑茶」ではなく「日本茶」となっており困った。再度学級担任に電話をかけ確認したが迷いが消えなかった。すると本人はiPhoneの画面を商品に向けて、映像で確認させようとした(図15)。学級担任は映像を見て許可を出した。購入後であったものの、本人は商品を写真に撮りメールで学級担任に送信した(図16)。



図 15



図 16

[エピソード4]

9月になって夏休みの思い出を発表する場面があった。本人が一番楽しかった思い出として、1人でスーパーに買い物に行ったことを発表した。それまでは外出は母親と一緒にだったが、小遣いを持って1人で出かけ、自分が好きなスポーツドリンクとお菓子を買って帰ったとのことだった。

その後、流行りの感染症に罹患したことをきっかけに学校を欠席することが多くなり、「お届け物いたします」の取り組みも機会が減っていった。登校した日にミッションを提案しても抵抗を示す姿が多かった。10月に実施された学園祭も体調不良で参加できなかったが、冬季休業前の修学旅行で仲間と楽しい思い出をつくってからは気持ちを切り替えることができ、授業に必要な教材の運搬や消毒を進んで行うようになった。そこで、取り組みを家庭生活場面に広げようと考えた。

(2)「街に出よう」について

本人に何をしたいか尋ねたところ、夕飯のおかずを買いに行きたいとのことだった。図4の質問紙とインターネットを使って、本人が大好きな店の唐揚げを買うこと、店舗の場所、唐揚げの値段、行き方、運賃、買い物当日の天候、持ち物など計画を整理し、Droptalk上に行程をスケジュール化した。行き方はGoogle Mapを活用し、目的地までの所要時間や移動するうえでポイントになる箇所を自分一人で決定して行程表に落とし込むことができた(図17)。



図 17

[エピソード5]

母親と最寄りの駅前にある薬局に立ち寄った際、薬剤師から薬が手渡されるまでしばらく時間がかかることを告げられた。すると、母親に薬の受け取りを頼み、本人は10分ほどの自宅までの道のりを一人で帰ると言った。母親は、これまでに何度も一緒に歩いた道であったためこれを許し、本人は無事に一人で帰宅した。

スケジュール化の作業では、自宅から最寄りの駅までの道順など自分に自信のある箇所については「自宅→〇〇駅」と入力を書く一方で、不安がある箇所については「2つ目の信号を右」など細かく丁寧に入力する姿がみられた（図 18）。

当日は報告者が数メートル後ろからついて行き、本人が安全に移動できるか、そして公共のサービスを適切に利用できるかを確認するとともに、本人が一人で解決できない事態に直面したときに支援することとした。

出発すると、移動については信号の判断（図 19）、信号がない箇所での左右確認、歩道など道の端を歩く、通行人との距離のとり方、（スケジュール化されてはいたが、）駅の運賃表の確認の仕方（図 20）、切符の買い方、改札口の通り方、切符の扱い方（手持ちのバッグに入れる。）、電車の待ち方、電車内での過ごし方（図 21）などどれも適切な行動ができた。スケジュール化した項目は達成した時点で完了のチェックを入れるようになっていたが、乗車予定時刻に迫っていたときなど次のスケジュールとの時間がないときには、いくつかのスケジュールをこなした後でまとめてチェックを入れる姿がみられた（図 22）。



図 18



図 19

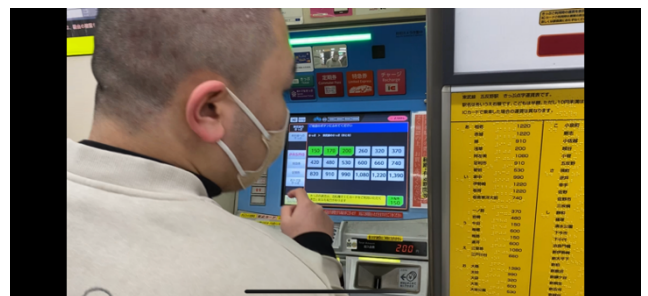


図 20



図 21

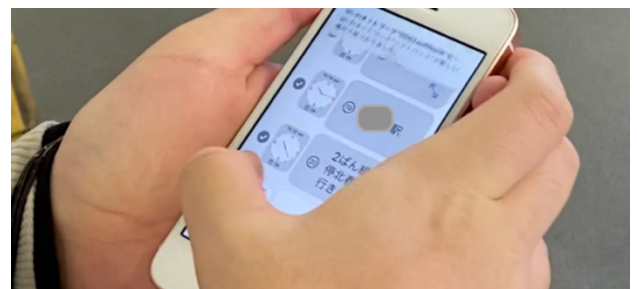


図 22

[エピソード6]

目的の店舗には開店 16 分前に到着した。店員に注文したところ開店を待つように言われた（図 23）。開店までの過ごし方に不安を覚え母親に相談の電話をして開店時刻を伝えたものの、気が動転して母親による状況確認に返答できず、「（どうすればいいかを）考えます。」と言って電話を切った。不安を解消できない様子だったため、報告者が近くのソファに座らせて今の状況を説明すると納得し、ソファで待つことを自ら母親に報告できた。



図 23

[エピソード7]

開店直前に店頭立ち値段表を確認すると、事前に調べた金額と違って値上がりしていることに気づいた。改めて母親に電話をかけ、今度は、「買っていい」という母親の指示を、やり取りの中で落ち着いて確認することができた(図24)。

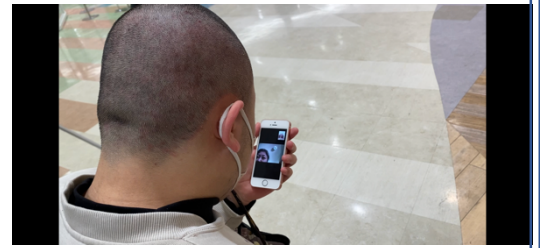


図24

帰路では、スケジュールにある予定時刻よりも遅れていることに気づき、歩みを早める姿がみられた。自宅が近づくと、後方を歩く報告者に「今日は風が心地いいですね！」など話しかけた。無事に買い物を終え、自宅に到着できた。後日、自分が買ってきたおかずを美味しく食べたこと、また、家族が喜んでくれたことを嬉しそうに語った。

【報告者の気づきとエビデンス】

1. 主観的気づき

対象生徒は、

- (1) 自分自身の行動予定を俯瞰する方法を得たことで落ち着いた生活ができるようになった。
- (2) 自分の行為に周りの人が喜んだり、感謝されたりする経験を重ねたことで生活が前向きになった。
- (3) 相談する方法があれば、失敗から学習できる。

2. エビデンス(具体的数値など)

(1) について

「お届け物いたします」の取り組み開始以前は、活動の量や時間がわからず自分の限界以上に体を酷使したり、自信のない活動が予定された日の前日に体調を崩したりしていたが、取り組み開始後はスケジュール表で適宜行動を確認して生活するようになったこと。また、学校生活場面では活動中に体調を崩すことがなくなったこと。

(2) について

「お届け物いたします」の取り組みは基本的に教員が本人に注文をするやり方だったが、後期以降は、注文する前に手伝えることはないかと教員に尋ねたり、生活の中に自分ができていることを探す様子がみられたりするようになったこと。また、それぞれのミッション終了後にお礼を言われたときの笑顔。

(3) について

「街に出よう」の取り組みにおける母親とのやり取り(エピソード6、7)。

3. その他エピソード(画像などを含めて)

「街に出よう」の取り組みで夕飯のおかずを買いに行った翌日、母親に「買い物に行ってくださいか?」と自ら申し出る姿があった。また、後日、学校で他にやってみたことはあるかと尋ねると、電車を見に行きたいという希望があった。対象生徒の祖父母宅の近くに目的の鑑賞スポットがあるとのことで、そこに一人で行ってみたいとのことだった。母親も賛成で、現在計画中である。

ミッションを重ねると、しだいに仲間が対象生徒の周りに集まるようになった。行動計画を立てる姿を見て「お前、すごいな。」と言って本人を認めたり(図25)、ミッションに自分も加われないか尋ねたりする様子がみられた。ミッション以外の自由時間においても、「〇〇君(対象生徒)はいないのかな。」などと言って対象生徒を探す様子もみられた。「お届け物いたします」や「街に出よう」の取り組みによって、「うまくやりたい」、「格好良くいたい」や「友達と仲良くしたい」という本人の思いが叶うチャンスが得られたと考える。

対象生徒は、来年度は高等部に進学する。調べたり尋ねたりする手段を得て自分自身の行動予定を立てられるようになった今、通学や、実習先への自立した移動だけでなく、余暇生活範囲を広げていけるよう願う。

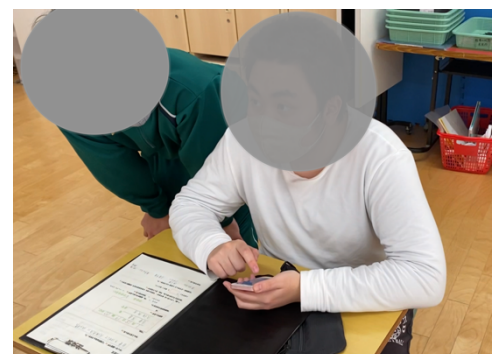


図25